

ビルマ調査行雑記

～ラングーンからシャン高原へ～

岸本文男

早いもので あれから一年半も過ぎてしまった。ぐずぐずしていたら 何もかも忘れそうな気がして 積ったホコリを払いながら 記憶のページを開くことにした。

1972年3月7日午後5時15分すぎのラングーン郊外
ミンガラドン飛行場は ただただ暑かった。

「えい 倒れてのちやまん」

これがビルマ第一歩の印象であった。このとき 本
当に倒れるとは思っていなかったのだが。



第1図 ロンジースタイルの娘さん ジャスミンの花を編んだ髪かざりは黒髪にぴったり(急行列車の窓から)

入国の手続は厳重であった。カメラの台数(2台まで可) ドルと円の申告(正直の頭に神宿る) 出納書の交付……。税関吏は容謝なくすべてのトランクを開いて 手をつっこむ。私は人前で自分のものがさらけ出される気恥かしさに戸惑ったものである。

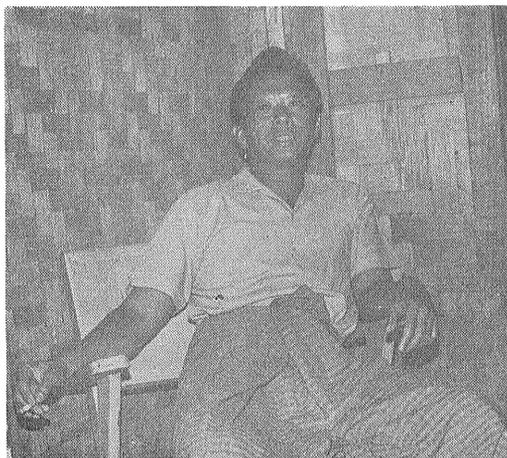
暮れなずむ よく舗装された国道の左右に椰子や高床式の家々 あるいは白亜のパコダが点在し ロンジー・スタイルの人々が歩いている(第1図)。「Hino」とマークをつけた もう日本では見ることのできない古いバスが鈴なりに人々を乗せて走り去って行く。同乗のウー・チー・ソー技師(第2図)(MDC: 鉱物開発公社)が盛んに話しかけてくる。彼とは出国のその瞬間まで顔をつき合せていたような気がする。それ位 一緒に行動することが多かった。

国道を右折したと思うと「Welcome」の赤いネオンが目に入った。日も落ちて Inya Lake Hotel の同じく赤いネオンが浮き上がっていた(第3図)。

結局 この夜は調査の打合せ 調査団の荷物整理・分配などで時間を費し ベッドに入ったのはすでに0時をかなり回った頃だった。羽田を発って15時間 すぐに寝入って夢も見なかった。

ビルマの一般事情

日本でビルマと呼ばれているこの国の正式名称は Union of Burma (ビルマ連合) で ビルマ人はミヤン



第2図 M. D. C. のウー・チー・ソー技師 漢民族系 そのためかどうかは知らないが マージャンで使われていることばを思い出しておかしかった



第3図 インヤレイクホテルの正面(ラングーン) ソ連が供与したビルマ最高の外国人用ホテル インヤ湖畔の広々とした地に立っている

第1表 月別平均気温・雨量・湿度 (1971年理科年表による)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ラングーン	気温(℃)	24.3	25.2	27.2	29.8	29.5	27.8	27.6	27.1	27.6	28.3	27.7	25.0
	雨量(mm)	8	5	6	17	260	524	492	574	398	208	34	3
	湿度(%)	62	66	69	66	73	85	86	87	85	78	71	65
マングレー	気温(℃)	20.2	23.0	27.5	31.8	30.9	29.6	29.5	28.6	28.8	28.1	25.1	22.2
	雨量(mm)	3	0	16	14	151	110	77	99	127	152	25	2
	湿度(%)	68	58	49	50	66	73	71	76	76	77	74	72
アキャプ	気温(℃)	20.2	22.1	25.9	29.3	29.7	27.7	27.1	26.9	27.6	27.6	25.1	21.7
	雨量(mm)	5	3	15	14	362	966	1,110	1,162	655	398	68	20
	湿度(%)	73	68	69	72	77	88	91	92	87	84	80	77

マ (Myanma) あるいはバーマ (Bama) と呼ぶ。

その総面積は日本の約1.8倍(677,790km²) 人口は日本の約1/4(28,201,000人:1971年 年間増加率2.24%) ビルマ最大の都市は首都ラングーンで 面積480km² 人口約171万人(1969年)と推定されている。国の拡がりは 北緯28°から北緯10°(約2,500km) 東経92°から102°(約1,000km)にわたる。そして北は中国 東北はラオス 東はタイ 北西はインド 西はバングラディッシュにそれぞれ国境を接し 南にはアンダマン海が開けている(第4図)。

したがってビルマは熱帯性・亜熱帯性気候帯に属しインドとの国境付近からアラカン海岸にかけての地域が世界に知られた多雨地帯で 年に5,000mmを越える降水量がある。

通常4月下旬から10月下旬の半年が雨期 残る半年が乾期で そのケジメははっきりしている。実質6ヶ月間に5,000mmの雨量とは日本では想像に余る。参考までに3大都市での月別気温と降水量を掲げておく(第1表)。筆者らの調査は乾期をねらって3月に行なわれたが 滞在中まさに一滴の雨も降らずほ

んど雲もみなかった。しかしジープで移動の際には眼・鼻から口の中まで テラ・ロッサの粉塵が舞ってくれた。

ビルマの地形を簡単に言えば 東はシャン高原 西はアラカン山脈・チン丘陵がそれぞれ南北に走り 北はパトカイ山脈・カチン丘陵・ナガ丘陵が半円弧状で北に突き出し 中央に中央低地帯の大平原 南に海を配して大三角洲が発達する ということになる(第4図)。さらに中央低地帯のまた中央にペグー丘陵があって 南北に伸びている。これら南北性地形の一環として4大河川(東からサルウィン河 シッタン河 イラワジ河 チンドウィン河)など各河川は主として南北にその河谷を形成している。これらの河川は雨期には濁流渦まく巨流に変わるのだが 乾期にはいたっておとなしい(第5図)。

住民は主としてモンゴル系の流れをくんだ約50の種族で構成されている。すなわちビルマ族(64%)を最大として カレン族(8%) シャン族(7%) チン族(2.4%) モン族(2.3%) パーオ族(1.5%) アラカン族(1.4%) カチン族(1%) それに中国人(2%) インド人・バングラディッシュ人計7%などからなっている。それぞれ民族固有の言語をもち ある程度その居住地域も一定しているようであった。

モンゴル系各民族の識別は難しい。インヤ レイクホテルでメイドをしていたオバさんがカチン族だと名乗ってくれて初めてビルマ族でないことを知ったのだし パダチョン鉱山のMDC基地の部落がモン族(第6図)の集落だと教えられなければ ビルマ族だと思ひこんだままであったろう。調査を手伝ってくれた若い地質屋の一人にアラカン族の青年がいた。彼を秘かにウーインド(ミスターインドの意)と呼んでいたのだが それほど容貌がインド人に似ていたのである。

宗教から言えば「ビルマは仏教国」と称されているよ



第4図 ビルマ概図

うに仏教徒が多く(約85%) 5%がアミニスト 4%が回教徒 3%がヒンズー教徒 同じく3%がキリスト教徒である。 仏教の戒律はきびしく 僧侶は深く尊敬され 男の子は一度は仏門に入る慣習になっている。 戦後もビルマに留った元日本兵はそのほとんどが僧侶になって生きている とのことであった。

ビルマの独立と政情

1822年来の英国の侵略に屈して以降 ビルマ人は幾多の独立闘争を行なったが それは散発的・一時的でなかなか実を結ばなかった。 そこにビルマ人たちの独立の父オン・サン(第7図)が登場する。

オン・サン(AUNG SAN: 1915—1947)はラングーン大学在学中に全ビルマ学生連盟の指導者の一人となり 1936年の学生ストライキを指導して注目された人である。 彼は民族の独立に生涯をかけて大学を中退し 排英・独立をめざすタクイン党に加わり 1940年にその書記長となったが 英印官憲の弾圧が激しくなる中で 中国人民解放軍と接触する目的をもって同年11月1人の同志とともに人夫に変装してビルマを脱出した。 しかし日緬協会書記兼読売新聞記者「南益世」と名乗ってビルマに潜入していた日本陸軍参謀本部の鈴木敬司大佐に探知され その連絡を受けた神田憲兵少佐にアモイで発見され 説得されて 日本に送られた。 彼は鈴木大佐を長とする特務組織「南機関」に協力して27名のビルマ人青年を日本に脱出させ 総勢30人の「ビルマ独立義勇軍」訓練隊を組織し 日本軍による激しい訓練を受け 1941年12月26日バンコクに移動して募兵を始めた。

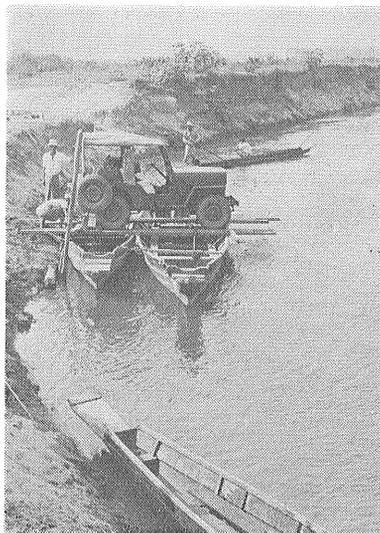
日本南方派遣軍のビルマ進攻作戦の発動に伴い 彼は

ビルマ独立義勇軍のビルマ側の指揮官として1942年2月ビルマに進撃し 同年3月8日 ラングーンに入城した。 彼の進撃に先立って 国内擾乱班を率いてビルマに潜入したのが現在の革命評議会議長ネ・ウィンその人である。

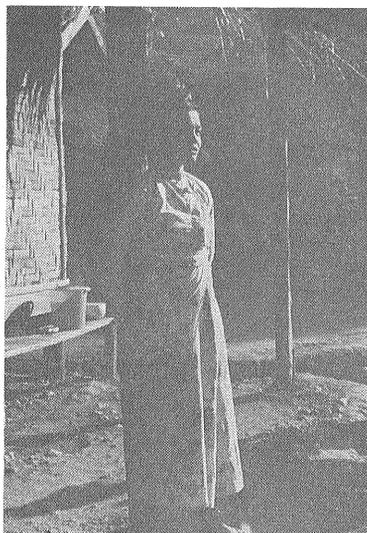
同年4月1日 オン・サンは自ら司令官となって独立軍をネ・ウィン大佐の第1師団とボウ・ゼーヤ大佐の第2師団に再編し さらに日本陸軍の指導の下にミンガラドンに士官学校を開設したが その第1期生の名簿にアウン・ペー 第2期生にチョー・ゾーの名がみえる。 前者が今の鉱業大臣アウン・ペー大佐(第8図) 後者が通産次官チョー・ゾー大佐である。

しかし オン・サンは「独立」ビルマに対する日本側のやり方に疑念と不信を抱くようになり 秘かにビルマ共産党と協同して反日地下組織を作り それを1944年8月には反ファシスト人民自由連盟(AFPFL)に発展させた。 強引なインパール作戦に失敗した日本陸軍がイラワジの会戦にも敗れ ビルマ最大の航空基地であったメイクテラの陥落は AFPFL の蜂起の引金となった。 それは1945年3月27日 叛乱に加った兵士は8カ大隊など約15,000名であった。 後方を攪乱された日本軍が英印軍の重圧を遅滞させながら シャン高原めざして退却を急いだことはいうまでもない。 この蜂起によってオン・サンと AFPFL は対英発言力を手にしたのではあるがしかし ビルマの独立への道は決して平坦ではなかった。

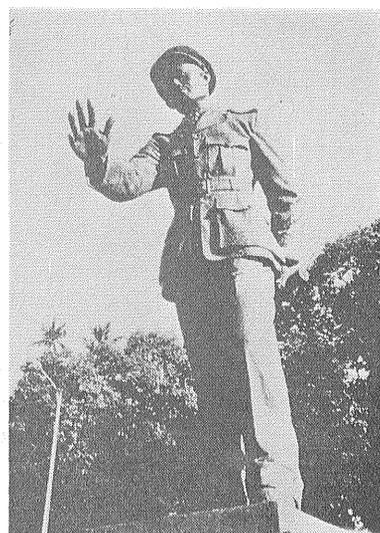
オン・サンは同年5月マウントパッテンとメイクテラで会見し 「ビルマ国民軍」を連合軍の指揮下に入れて「愛国ビルマ軍(PBF)」と改称することに同意し さらに9月セイロンのカンディーの会談でこの PBF と当初から連合軍の指揮下にあった「正規ビルマ軍」との



第5図 シットン河(ポーンロン河)を渡る「フェリーボート」 積みまれているのは三菱ウィリスのジープ



第6図 モン族の女性 日本にもこのような顔立の人は珍しくない ただミスなのかミセスなのかはわからなかった



第7図 ラングーンに立つオン・サン将軍の銅像

合体・再編成に同意したが 彼自身は軍に留まることを辞し AFPFL を指導して政治一本の道を進むことにした。だが 日本式の訓練と装備の PBF と英国式でカレン族主体の「正規ビルマ軍」との融和は難しく 連合軍司令部も PBF の兵士を疎外して対立をあおった。

そのため PBF の兵士の多くは故郷に帰り その将校も定員枠が少ないとの理由で大部分が下士官に格下げされた。'70万博のときビルマ政府代表として来日したイエ・ガウン農林次官も当時下士官に下げられた一人である。

定員に入れなかった PBF の元兵士たちには職がなかった。オン・サンらは実戦の経験があるこれらの元兵士を集めて「人民義勇軍組織 (PVO)」を作ったが これは軍隊と同じものであった。

ビルマ共産党はオン・サンと AFPFL の「ビルマ独立路線」の内容に反対したのだが 共産党自体の方針をめぐる意見の対立が深刻化し 1946年2月タキン・ソーらが別党を作って「赤旗共産党」を名乗った。残ったタキン・タン・トウンらの共産党は「白旗共産党」と呼ばれるようになった。ここでオン・サンらは共産党を AFPFL から除名した。その結果 「人民義勇軍組織 (PVO)」に動揺が生まれ 半数は両共産党に走り PVO を去った。

オン・サンは同年9月 英国総督ランスと企ててビルマ中間政府を組織し その副首相となり ついで翌1947年1月 ロンドンでオン・サン=アトリー協定を結んでビルマの完全独立を準備したが この協定が対英協調を基礎としていたので 反対派の不満を買い さらに1947年4月の制憲国会の総選挙に PVO を動員して圧力をかけたことで反対派を怒らせ ついに同年7月19日 閣議中に暗殺された。

AFPFL のウー・ヌーが彼のあとを継いだ。そして1948年1月4日 ビルマは独立を達成したが 3月にはそれまで合法活動を続けていた「白旗共産党」が 7月には PVO も再分裂してボウ・ラヤウンらの「白色 PVO」がそれぞれ地下活動に転じた。だが ボウ・フムアウンらの「黄色 PVO」は AFPFL にとどまった。

「ビルマ国軍」内ではカレン族の将校が幅をきかせ 旧「愛国ビルマ軍」出身のものは口を封じられていた。クーデターが策され ネ・ウインをかつぎ出す動きが激しくなったが 彼は動かず 1948年8月10日のクーデターは不発に終わった。第3大隊長ボウ イユートツは涙を流しながら大隊とともに地下活動に入っていった。第5大隊のボウ ゼーヤも また第1大隊も第6大隊も地下活動に移った。かつて オン・サン司令官の下でビルマ独立義勇軍2ヶ師団のそれぞれ長であったネ・ウインとボウ・ゼーヤがここで「たもと」を分ったのであ

る。その時 ネ・ウインは第4大隊長であった。

同年の末 今度はカレン族の蜂起が起こった。原因は独立ビルマにカレン族の自治がないことに対する不満であった。ウ・ヌーはカレン族鎮圧の軍を起すとともに 軍からのカレン族高級将校の追放を命じ 代ってネ・ウインがビルマ軍司令官に躍り出た。この鎮圧戦の功労者の中にまたもアウン・ペー現鉱業大臣の名が見える。カレン族の闘いは1951年8月の指導者ソー・バウジーの死によって下火となった。

一方 政界では1952年頃から AFPFL 内に分裂の兆がみえ始め 1958年完全にウー・ヌー派 (清廉派) とウーバスエ派 (安定派) に分裂し その形のまま1960年に総選挙が行なわれ 前者が圧勝してウー・ヌー内閣が誕生した。これが契機となって 清廉派は別党 (連邦党) を組織し 安定派が AFPFL を継いだ。

しかし今度は連邦党の中で 軍人派・文人派・政党内派の三つ巴の派閥争いが始まった。加えて ウー・ヌーが仏教国教化法を強引に議会で成立させたために国民の間に新しい対立が生れ そこにもってきて モン族とアラカン族が自治州の設立を すでに自治州を獲得していたシャン族はビルマ連合からの独立を要求し始めた。

この大きな混乱とそれに加わる経済の不安定は 1962年3月1日の軍人による無血クーデターを呼び 政権はネ・ウイン軍司令官らの手に移った。

彼らは最高国家機関として軍人による「革命評議会」を設立し この国家的危機の乗りきりを企てた。そしてまず 「革命評議会」は綱領「社会主義へのビルマの道」を発表し その実践組織として 「社会主義計画党 (BSPP)」を組織した。これが現政権の出発であった。

1963年2月に右派の総帥オン・ジー通産相を解任してからの革命評議会は社会主義的方向を急速に進めて 銀



第8図 鉱業大臣アウンペー大佐 (調査団とのこの会談当時は鉱業副大臣) 中央こちらむきの軍服の人。

行の国有化を手始めに全産業の有償国有化 外国企業の
接収 労働者・農民の保護立法などを行なう一方 独立
に貢献しながらウー・ヌー政権下で弾圧されて 武装闘
争に移っていた共産党などの反対党および少数民族の自
治要求にもとづく各民族代表との話し合いに入った。

だが 話し合いは不調に終わり ネ・ウィンらは決裂
後直ちに社会主義計画党以外のすべての政党を禁止し
「社会主義へのビルマの道」を歩んでいる (第9図)。

禁止された諸政党 自治や独立の要求を受け入れられ
なかった少数民族の対革命評議会闘争は今なお続いてい
て 多くは武装ゲリラ 都市では地下政治工作の形をと
り ビルマ国軍・警察軍と山岳地帯で戦火を交え ある
いは 1972年4月ラングーンでばらまかれた対政府闘争
を呼びかける共産党のビラとなって現われている。 ラ
ングーンで発行されている英字新聞「Working People's
Daily」にもしばしばゲリラ討伐戦の戦果なるものが載っ

ている。 さらに 地方の治安不安定に乗じた野盗の横
行が治安を一層悪化させ 1965—1967年頃には幹線列車
まで襲撃されていたというが 私がその幹線列車につ
がなく乗り得たところをみると 今は安全になったので
あろう。 それでもシャン高原では調査に約1ヶ小隊の
武装兵士が加って警備に当たったし ラングーンでは往復
24時間の範囲しか外国人の遠出は許されていない。 そ
れ以上の遠地旅行はビルマ政府の許可が必要である。
とくにシャン族の多いタイとの国境地域は不安定で 地
質図でもその地域は空白が目立つ。 今年の6月 ネ・
ウィンはタイを訪れ タイ国政府と会談した。 犬猿の
間柄と聞いていただけに このニュースには驚いたが
共同声明が出されなかったところをみると まだまだ両
国の関係改善の道は険しいのであろう。 地質図の空白
もここ当分埋まりそうにない。

ラングーンにて

前もって物資を調査地に送るということで ラング
ーンでしか入手できない物資もあるからと 一同うち揃
い市街地中心部のマーケットと外人用国営商店 (Diplo
matic Shop) にでかけた。

まずマーケットで つば広の日除け帽子を求める。
このマーケットは私営商店の集まり とのことだった。
思ったほど不潔ではなかったが (第10図) 飲食店の部
分だけは臭いがすさまじく 私は呼吸をとめて小走りに
通り過ぎた (第11図)。

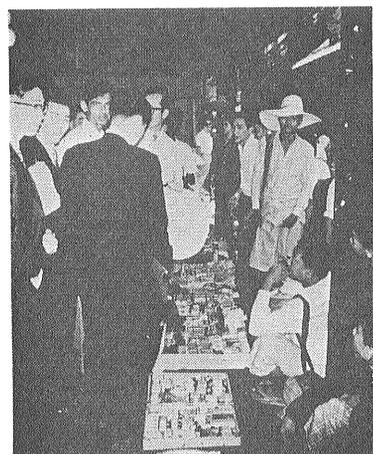
目的にふさわしい帽子が見つかった。 薄く剥いだ竹
を編んで作ったもので 恰好も悪くない。 作りも日本
の麦わら帽よりしっかりしている。

「ショー バー (安くしろよ)」

結局 超つば広型約100円 普通つば広型80円位になっ



第9図 ビンマナの砂糖工場に付属するホテルの広間に掲げられていた
国旗とオン・サン (左) ネ・ウィン (右) の写真



第10図 マーケットで日除け帽子を買う 私たちが
10ヶばかり買ったので商人は店を閉じ
て帰るといふ 1日分以上をさばいた
ことになるのだそう



第11図 飲食店街 左側の倉庫風の建物の中から異様なにおいが流れ出て吐き気がした

たかと思う。この帽子はやがて一行のトレードマークとなった(第12図)。

次は食糧補給品の物色と Diplomatic Shop に自動車をとぼす。大使館の手配でチャーターされた自動車は有難かった(第13図)。ラングーンの中四つ車のタクシーを拾うことはまず無理だし マツダの三つ車タクシーならいつでも拾えるが 窮屈である(第14図)。めざす加工食糧品は2階にあった。英国製あり 西ドイツ製あり シンガポール製ありで みたところすべて輸入品であった。

東南アジアの例にもれず ビルマでもなま水は飲めない。アミーバ赤痢やチフスになるからである。Inya Lake Hotel では沸騰させ こしてから冷やした水をテルモスに入れて配っていた。一般家庭では 素焼のつぼに入れたなま水の上澄を飲んでいる。一行は安全と楽しみを合わせて 缶ビール・缶ジュースの類を1人1日10ヶ見当で購入したが これは多すぎた。結局はあちこちのキャンプで住民にプレゼントすることになっ

たのである。店内をブラブラしてみる。店員をつかまえて「さらさ」があるかどうか 尋ねてみた。しかし「さらさ」の意味がサッパリ通じない。第一私は「さらさ」の英名を知らないし その特徴も知らないの で 話はコンガラがってしまった。と

「ドンナモノデスカ」

これには参った。彼女は日本語学校の生徒だったのである(第15図)。ラングーンには日本語学校が3校あり彼女の先生は「ナガイセンセイ」だという。どんな人かを想像してみたが 化学課の永井さんの顔が浮んでおかしかった。

「また必ず来ますよ」

と 一行が美しく飾られた店を出たら お客さんは一人もいなくなっていました。

ビルマの鉱業事情

ビルマの鉱物資源の調査・開発は 鉱物開発公社(Mineral Development Corporation) が全体として責任を



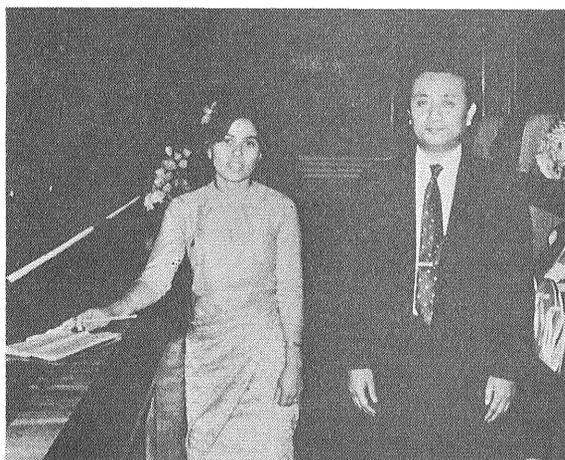
第12図
No.4 鉱山の宿舎前
出発準備のひとつ
とき トレードマ
ークの日除け帽 左
から鈴木(OTC
A) 田中(日鉄鉱
業) 重松(大手開
発) 大森(鉱山局)
塩原(三井金属)
の各氏



第13図
チャーターした自
動車の前に立つ運
転手君 いつでも
喜んで運転してく
れた わが地質調
査所にもこれとよ
く似た顔の人がい
る



第14図 さっそうと走るマツダオート三輪タクシー(ラングーン)



第15図 外国人用国営商店で たまたま知った日本語のうまい店員さん レッキとした国家公務員である ショーウィンドウの上においてある原稿用紙は日本語学校の宿題「私のお父さん お母さ

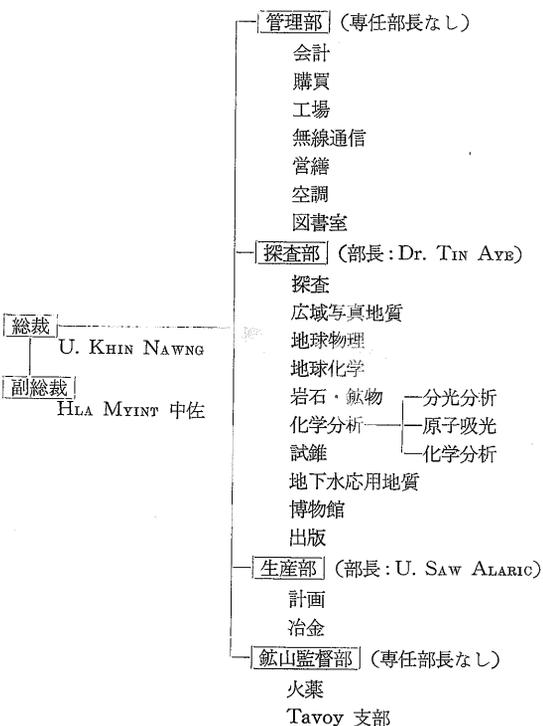
第2表

鉱 山 現 況

鉱 種	地 域	1969			1970			1971		
		国営	民営	計	国営	民営	計	国営	民営	計
鉄	マンダレー地区	1	—	1	1	—	1	1	—	1
"	北部シャン州	4	—	4	4	—	4	4	—	4
鉛・亜鉛	北部シャン州	1	—	1	1	—	1	2	—	2
方鉛	南部シャン州	1	1	2	1	1	2	2	—	2
錫・タングステン	タポイ地区	4	69	73	4	23	27	4	—	4
"	マグイ地区	2	16	18	2	6	8	2	—	2
"	ヤメチン地区	—	17	17	—	17	17	1	—	1
"	タトン地区	—	—	—	—	—	—	1	—	1
錫・タングステン灰重石混合物	カヤ州(ロイカウ地区)	1	—	1	1	—	1	1	—	1
石炭	カレワ(モーレイク地区)	1	—	1	1	—	1	1	—	1
重晶石	マンダレー地区(アニサカン)	1	—	1	1	—	1	1	—	1
ヒスイ	カチン州	1	—	1	1	—	1	1	—	1
宝石	モゴーク(マンダレー地区)	—	—	—	5	—	5	9	—	9
石炭	タイエット地区	1	—	1	1	—	1	1	—	1
"	北部シャン州	—	—	—	—	—	—	1	—	1

負っている。とくに大規模に開発される鉱山の場合には別の公社を設立して稼行に当らせている。ボードウィン鉛・亜鉛鉱山における Myanmar Bawduin Corporation はその好例であろう。なお石油の探査・開発は Myanmar Oil Corporation が担当している。

Mineral Development Corporation の機構は次のとおりである。



上記 MDC・MBC・MOC や Myanmar Quarry Corporation などを監督下におくビルマ鉱業行政の中心に鉱山省 (Ministry of Mines) がある。その鉱業行政に関する鉱山大臣の諮問機関として 鉱業諮問委員会 (Geology, Petroleum and Mining Advisory Council) が設置されている。

調査当時の MDC 従業員は約3,000人 年間支出予算額は2,700万チャット (1チャット≒60円) で モニワ鉱山など20数件のプロジェクトをもち 9鉱山の運営を行なっている。MDC のおもなプロジェクトとしては主要な外貨収入源である宝石の採掘のほか 採掘・選鉱処理が容易な上 高価な錫・タングステンなどがある。後者はタポイ地区を中心に マグイ地区にも選鉱センターを置き その他の産地のものはラングーンの本部において選鉱処理されている。

現在稼行されている鉱山は32ある。その鉱種別内訳は 第2表のとおりである。

従来民営であった鉱山も次第に国有になり 1970年9月以降は民間に鉱業権が許可されなくなっている。とはいえ 小規模な請負方式による粗鉱権はなお存続しているようである。

鉱物資源の生産状況は 第3表のとおりである。

1970—71年度の原油生産実績は 1961—62年度に比べて約40%伸びているが 国内需要も急速に増大しているため 原油は依然として輸入されている。当面は自給を目標にし 将来は原油および石油製品の輸出に移るべく 目下積極的な探鉱が行なわれている。

一方 非鉄金属部門では ボードウィン鉱山に依存す

第3表

鉱物資源の生産状況

鉱種		単位	1961-62	1964-65	1968-69	1969-70	1970-71
原油		千ガロン	152,810	133,210	208,880	204,890	217,000
石炭		トン	—	8,200	7,962	11,047	20,000
ヒスイ		ピンス	31,000	21,000	852	1,398	6,186
銀地金		千オンス	1,437	1,204	827	553	780
亜鉛精鉱		トン	14,225	14,131	9,734	6,968	6,400
銅マッ		"	354	310	186	195	185
ニッケルスパイ		"	520	266	107	83	90
鉛地金		"	16,615	15,693	9,986	7,518	8,100
アンチモン鉛		"	376	561	356	284	290
方鉛		"	200	270	653	828	600
錫精		"	900	910	389	409	526
タングステン精		"	1,440	70	163	197	296
錫・タングステン混合精		"	—	440	270	238	292
錫・タングステン灰重石混合精		"	—	360	123	166	688
アンチモン		"	—	—	—	178	660
石灰		"	—	407,000	553,000	591,000	591,000

第4表

貿易会社による鉱物資源の購入状況

(単位:千チャット)

	単位	1967-68		1968-69		1969-70		1970-71	
		数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
国内生産			22,285		57,550		88,320		150,425
一般用			453		25,117		29,884		57,941
ロソク	ケース	12,483	453	9,952	378	5,249	186	60,000	2,182
灯油	ガロン	—	—	21,396,557	24,739	21,480,861	29,698	5,542,685	55,759
産業			21,722		32,349		31,197		82,699
アンチモン	トン	—	—	—	—	124	194	660	1,638
錫精	"	611	1,978	559	3,538	582	5,962	759	5,776
錫・タングステン混合	"	57	173	11	20	8	29	367	3,826
錫・ウォールクラマイト・灰重石混合物	"	122	671	106	535	149	1,012	700	5,724
亜鉛精	"	7,884	3,784	7,056	6,019	7,434	6,341	800	8,221
鉛スラ	"	692	150	575	126	606	132	1,000	218
タングステン精	"	226	1,473	198	1,204	288	2,831	367	2,596
アンチモン	"	163	299	361	622	—	—	250	581
ニッケルスパイ	"	181	164	86	54	162	245	90	179
粗錫	鉛	11,217	11,938	9,273	15,960	6,400	11,015	9,400	20,210
錫地金	"	125	96	—	—	—	—	75	59
鉛(ハンダ)	"	44	12	19	227	—	—	40	117
銅マッ	"	127	71	162	499	162	499	175	1,054
石灰	"	8,234	664	5,945	491	4,471	378	20,000	2,928
鉛	"	360	249	234	152	—	—	—	—
石油	トン	—	—	1,382	104	—	—	7,000	924
パラフィン	トン	—	—	2	38	—	1	10,200	5,937
燃料	トン	—	—	—	—	—	—	65,000	16,241
潤滑油	ガロン	—	—	1,546,680	2,252	1,497,805	2,191	2,922,243	4,033
潤滑油・グリース	"	—	—	—	508	—	367	—	2,437
投資			110		84		27,239		9,785
銀	トロイオンス	16,773	110	7,017	84	2,751,417	27,239	820,000	9,785
輸入			3,711		3,960		2,789		3,000
産業用			3,711		3,960		2,879		3,000
石油ゼリ	トン	242	305	115	96	—	—	—	—
粗鋼	"	2,591	932	3,281	854	2,085	1,040	1,158	528
アルミニウム・インゴット	"	533	1,353	553	1,438	424	1,215	462	1,177
石灰	"	6,725	589	6,480	462	7,933	568	7,117	654
その他	"	1,000	179	4,399	700	—	—	3,250	588
その他	"	45	353	60	404	6	56	32	53

第5表

鉱物資源の輸出状況

	単位	1961—62	1964—65	1965—66	1966—67	1967—68	1968—69	1969—70	1970—71 (10月～3月)
鉱物資源	千チャット	48,338	62,899	53,201	33,075	22,127	51,204	38,152	20,000
銀	千チャット	6,275	8,557	6,176	4,046	—	17,350	6,399	2,586
	千トロイオンス	1,169	1,372	1,003	655	—	2,900	759	298
亜鉛および精鉱	千チャット	3,176	7,956	6,295	3,029	2,550	2,579	2,923	1,823
	ト	14,744	14,310	15,120	9,090	8,219	6,781	6,841	298
銅マットおよび ニッケルスパイス	千チャット	793	1,312	696	—	991	775	2,144	—
	ト	685	760	398	—	398	308	380	—
粗鉛	千チャット	12,590	23,132	19,310	14,279	9,293	14,522	7,912	4,109
	CWt	329,520	273,959	271,675	244,226	170,820	216,887	104,000	63,381
アンチモン鉛	千チャット	274	518	1,073	376	172	623	—	221
	CWt	5,753	5,012	16,179	6,711	3,260	7,231	—	141
鉛鉱石および精鉱	千チャット	195	54	192	382	191	274	—	—
	ト	450	72	234	666	306	388	—	—
錫精鉱および鉱石	千チャット	15,954	11,809	11,654	3,517	4,367	6,171	5,978	5,392
	ト	1,965	936	939	319	485	607	1,000	448
タングステン鉱石 および精鉱	千チャット	3,116	7,023	4,374	3,444	1,644	4,214	6,311	2,459
	ト	653	946	422	335	126	309	300	106
アンチモン鉱石	千チャット	155	—	—	—	—	—	72	—
	ト	132	—	—	—	—	—	39	—
石炭	千チャット	85	—	—	66	32	3	—	—
灯油 ディーゼル油 その他鉱物油および ガス	千チャット	19	—	7	1,245	536	257	791	—
	ガ	17,420	—	2,532	2,454,000	911,000	306,000	1,219,000	—
パラフィンワックス	千チャット	5,706	2,538	3,424	2,691	2,351	4,436	5,622	2,867
	ト	9,295	5,784	7,364	6,062	5,325	9,623	11,000	4,870
石油コークス	千チャット	—	—	—	—	—	—	—	374
	ト	—	—	—	—	—	—	—	4,000
ナフサ	千チャット	—	—	—	—	—	—	—	169
	ト	—	—	—	—	—	—	—	3,113
宝石類	千チャット	4,178	2,200	10,625	8,711	8,572	11,081	9,314	12,366
真珠	千チャット	2,448	1,719	6,878	6,445	6,082	5,075	3,798	2,284
	カラット	347,465	104,809	133,263	125,000	134,000	139,000	167,000	—
ヒスイ	千チャット	1,725	202	2,359	1,215	2,107	4,437	4,730	9,351
	Try.lb	201,941	3,101	51,443	56,000	44,000	10,181	81,914	—
宝石	千チャット	5	279	1,388	1,041	383	1,569	786	731
その他	千チャット	1,804	1,510	582	1,460	229	528	1,542	—
総計	千チャット	1,266,800	1,082,400	925,700	669,353	516,096	551,733	538,940	295,627

る銀・亜鉛・鉛・銅・ニッケル等の生産は同鉱山の衰退によって半減してきている。また錫・タングステンは1961—62年度よりも減少しているがここ数年来回復の傾向にある。さらにビルマの鉱産物として著名なものに貴石・宝石の類があるが全体としては減産がいちじるしい。なお工業原料資源は従来輸入に頼っていたのだが1968—69年度から国内需要を満たすようになり現在積極的に輸出市場調査にのり出している。

輸出鉱物資源はすべて貿易公社(Myanmar Export and Import Corporation)を通じて国際入札にかけ海外に販売されている。因みに貿易公社による鉱物資源の輸入状況および鉱物資源の輸出状況は第4・5表のとおりである。

急行列車の旅

3月10日のホテル出発予定は午前4時30分とのことだった。ビルマ到着以来約束した時間を遅えたことのないビルマ側の実績からするとこの早朝の時刻を1分も遅れることはないだろう。私は覚悟を決めて眠りについた。

一人一人通らないラングーンの幹線道路に朝の冷気がさわやかに流れている。夜が明けきれていないラングーン駅にはどこから来たのか乗客の姿が多かった。乗る列車は午前6時ちょうどラングーン発マンダレー行急行。ホームに入る前に持ち込み荷物のチェックを受ける。裁判所の判事のように50がらみの男が高い座に坐って乗客の荷物一つ一つに白いチョークでV印をつけている。別に荷物を開くわけでもない。

ホームに入ったがまだ時間があるので駅の食堂に一

同揃って席を占める。ミルクがたっぷりに入った紅茶に「金つば型あんなし一砂糖入り一ぼた餅」とか「ねじり棒型クッキー風ドーナツ」がでてきた。こわごわとつまんでみたがうまい。私は皆さんの領分をかなり侵したように思う。欠けた茶わんがとてもよく釣り合った雑然とした駅食であった。

列車は定時に発車した。「どうせ列車ダイヤなんてデタラメだろう」と思いこんでいた私にはこの定時発車がチョットしたオドロキであった。列車を引くのは日立製のジーゼル機関車(第16図) 座席は白いカーがかかった一等車 (special seat)。

ラングーン郊外の山一つ見えない平原に出る頃地平線の彼方に真紅の太陽が昇ってきた。昇る朝日にシルエットを作るはるか彼方のパゴダと一本の椰子はまさに一幅の絵であり平和なたたずまいであった。

あれよあれよと車内は暑くなり天井の扇風機が急忙しく回り始める。車内にビルマのポピュラーソングが流れ次第に眠くなってきた。とどこかで聞いたメロディーに少し考える。そう言葉こそ違いがまさに「フジノタカネニフルユキモ……」。とあれである。

10時頃だったか弁当が配られた。容器は厚紙中味はドライカレーにビルマ風の漬物 幸いワントン用に似たスプーンがついている。辛くてやけに量が多い。半分くらい平らげるのがやっとならであった。さて空箱をどこに棄てるか思索していたらウー・チー・ソー技師が窓から投げるといい自ら手本を示してくれる。私はそれを見ならった。水が欲しい。うまいことにかの Mr.チー・ソーがテルモスを回してくれる。キャップに受けてみると赤橙色の液体でついぞ見れない代物であった。何となく気味が悪くてチョットだ

け口に含み次に回した。とても甘かった。後で知ったのだがこれぞ有名なマンダレーオレンジの無添加・天然ジュースだったのである。

窓外には乾いた大地が続きところどころに残る泥沼(第17図)の中に水牛がうずくまり泥の流れの中で子供たちが遊んでいる。

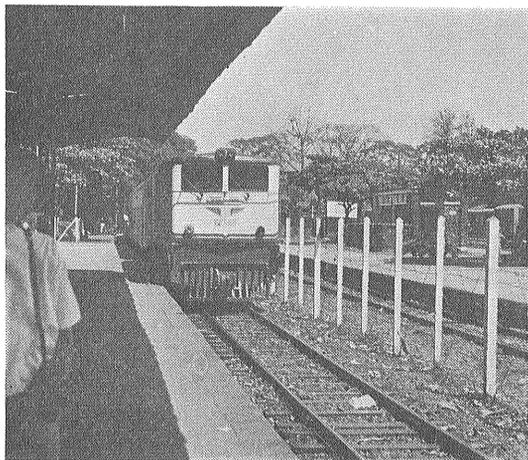
トングー駅に停車する。大きなヤカンをぶらさげあるいは水がめを頭にのせた子供たち(第18図)や頭に果物をのせた子供(第19図)が何とかかんとか呼びながらホームといわず線路上といわず歩き回っている。果物の中味なら安全だろうと思ひ手招きしたらたちまち4・5人の子供がよってきた。

「ショーバー」

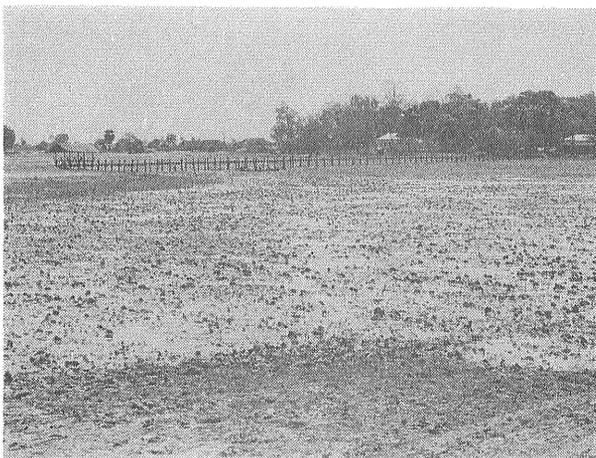
窓越しの掛け合いで太・短かい赤いバナナと黄色いバナナを手に入れた。1チャットー1房。1人で6本を食った人を入れて7人がついに食べきれなかった。

このトングーの町は1942年3月26日から31日にかけての徳島第143・丸亀第112両歩兵連隊・善通寺第55騎兵連隊 久留米第56搜索連隊と中国第200師団との激戦で焼失したと記録されているがそれからすでに30年平和な地方都市の姿が窓外をよぎるのみであった。

ここらあたりから鉄道は単線になったように記憶する。かつては複線だったものが1943年に始まった泰緬鉄道の建設のため日本軍によって搬去られてそのままになっているとのことであった。レールも何もかもない路床はいたずらに粒塵をまき上げるだけで空しいものであった(第20図)。窓外に見える白亜の建物はおそらく英国時代のものなのだろう。そそり立つ椰子に囲まれビルマ人の高床式平屋の褐色の色どりと強いコントラストをなしている(第21・22図)。路床を辿る僧侶は法衣を頭に回し水牛の群もノロノロと外は



第16図 日立製ジーゼル機関車(ピンマナ駅にて) ラングーン駅でも同じだが鉄条網はめざわりである 陸橋を渡らぬやからがいて危険だからであろう これも暑いためのか



第17図 この湖も乾期には泥地に変るらしい 空には雲一つなく本日もまた快晴

いかにも暑そうであった。列車の中は扇風機と吹きこむ風で いくらかましである。一同はスヤスヤと寝入っていた(第23図)。

車掌さんが通る。朝 検札に来た人とは違うが 国有鉄道員の制服がよく似合っている(第24図)。

ラングーンを出発して以来 鉄道とほぼ平行し 立派に舗装された国道1号線が見えかくれしていた。これがかつての「援蒋ビルマルルート」で 1939—1941年頃には鉄道と合せて 1日1万tを越える物資の輸送をみたという道路なのに 今では走る自動車のまた何と少ないことだろう。2kmに1台程度 それも軍のトラックやジープが主である。民間のバスやトラックはまれであった。

列車は定刻を5分ほど過ぎて ピンマナ駅に着いた。所要時間7時間35分。平均時速は約47km/h。「列車襲撃」には ついに逢わなかった。

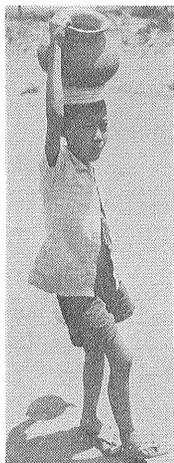
シ ョ タ ン 河 (ポーンロン河) を 渡 る

時刻は まさに暑い盛りである。雲一つない空の下例の日除け帽が役に立つ。驚いたことには ビルマ人は男も女もノーハットで歩いている。1人だけ 女の人が黒いコウモリ傘をさしていた。

待ち受けていたMDCのジープに分乗する。初めてみるソ連製のジープとそして三菱ウイリスである。前者の計器は“km” 後者のものは“mile”で標示してあり 走行距離は両方の単位で読みとることになった。

ここまでくると マツダ三輪のタクシーは姿を消し代って二輪馬車が客をのせて走っている。定員6名 時速15km というところか。けっこう軽やかで 楽しみにみえた(第25図)。

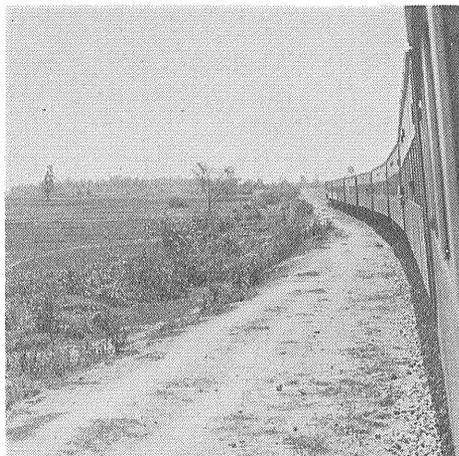
MDC ピンマナ支部(第26図)に着き 一階の広間で 食事をとる。日本人向きにという配慮なのであろう。



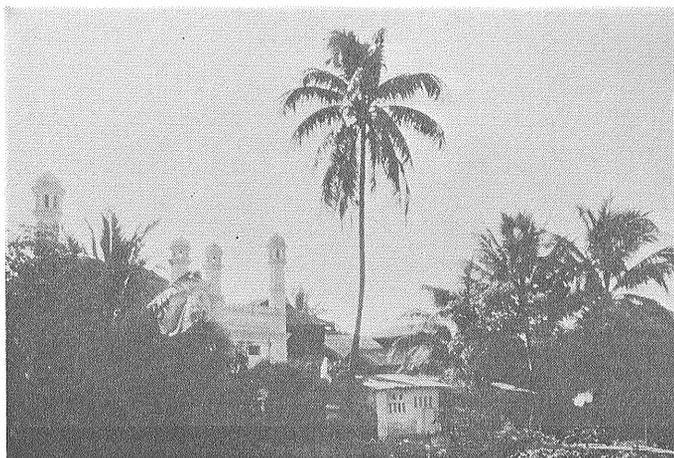
第18図 水売りの少年 (トングー駅)



第19図 くだもの売りの少女 まだ12—13才とみえた(トングー駅)



第20図 線路をはずされて路床がむなく続く 戦争の傷痕にふれた思いにしばらく考えこむ



第21図 白亜の建物は英国の遺産らしい



第22図 トングー城壁の外側 高床式の建物が並ぶ道を行くのは自転車タクシー

中国料理風にしつらえてあった。それ以来 専用のコックさんの手で中国料理主体の食事が提供されたのである。しかしこの時はバナナの食べすぎで食がすすまざる例のマングレー オレンジのジュースで流し込んだ。

今夜は予定通りにセブドーン (Seikphudaung) 泊りとか 再びジープに分乗・出発である。この建物の外回りの土堀などに点々と残る弾痕は 1942年4月19日午後 の徳島歩兵第143連隊と中国第200師団との戦闘か 1945年4月13日の日本第33軍司令部部隊とインド第17師団との戦闘のものに違いない。これから渡るシッタンの流れも 1945年の雨期には退却する日本軍の多くの兵士を呑みこんだ悲しみの河である。

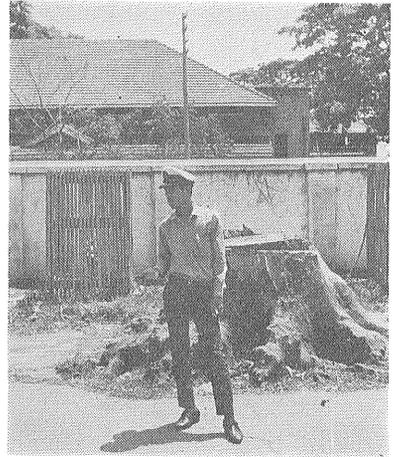
ピンマナからMDCのピンマナ支部長キム・マンニュー氏が同行する。小肥りの偉丈夫で 珍しく帽子をかぶっている。Colorado School of Mines 出身のなか

なかの紳士であり 機智に富み 冗談もうまかった。ぜいたくなもの一つ身につけていなかったし 物欲しそうな態度のかけらもなかった。起居をともにしながら 彼に対するビルマ人の心服ぶりには感心させられたものである。ピンマナ郊外に日本が賠償として建設した砂糖工場があった。この工場のおかげで ビルマにザラメが登場したのだという。そこまでは道路も舗装されているが それから先は大変の始まりで 舌を噛まないまでも 砂を噛むのは避けられない。シタン河の渡河点まで来てホッとしたが むしろ渡ってから先の方がひどかった。

シタン河も この辺になるとポーロン (Paunglaung) 河と呼ばれるらしい。乾ききった砂地が拡がって 乾期の河幅は50mもなさそうだった。まずソ連製ジープが河床を走りかけて 動かなくなってしまった。砂地にめり込んで うなっている。3・4人の後押し



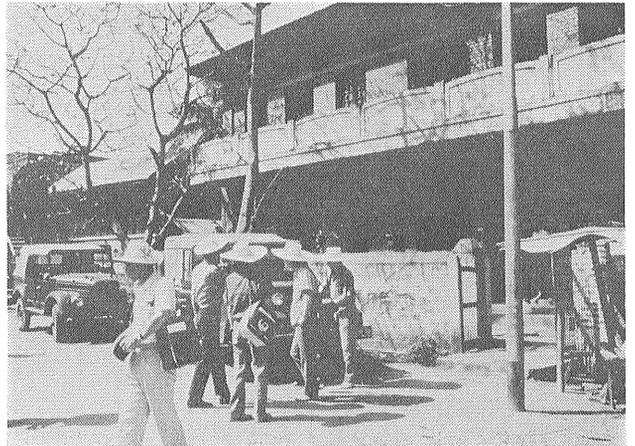
第23図 スペシャルシートでおやすみ 左は大丸 (日本鉱業) 右は田中 (日鉄鉱業) の両氏 急行列車が通過する小さな駅 駅名はビルマ語だけなのでサッパリ読めない パーマザガーナマレブー (私はビルマ語がわからない)



第24図 トンゲー駅の駅員さん ビルマにしては近代感覚のあるスタイルだが駅名をさげふことはできない



第25図 ビンマナ駅前の2輪馬車 ちゃんともーターがついている 後方は小学校 ビルマはバレーとサッカーが盛んで



第26図 MDCピンマナ支部 トレードマークの日除け帽 そしてその後にあるソ連製と日本製ジープ



第27図 顔で笑って心で？ 一生懸命バランスをとりながらシタン河を渡る一行

でやっと走り出した。一同の目が一勢に三菱ウイリスを追う。これはいとも軽やかにスイスイと走り去って行った。

フェリー・ボートにジープがのせられて ゆっくりと河を渡る。フェリー・ボートといえば聞えはいいが2隻の渡し船を並べて横板でつないだものだ。ジープの車輪が幅30cmばかりの板の上にやっと収まっている感じである。一行はやけに細長い小さな舟にのせられ顔は笑っていても内心は緊張してバランスをとるのに忙しい(第27図)。誰もカメラは抱いたまま。水の流れは思ったよりも急であった。

ともあれシタン河を渡った。砂のテラスに立ってみると調査用具やら食糧やらをゴタゴタと積んだトラックが発進準備でざわついている。私たちのジープのほかに何台かのジープもある。そしてライフル銃や自動小銃を手にした兵士が乗っている。聞いてみると一行の護衛兵だという。もと軍人の私だが銃を見るとイヤな気分になってしまう。でも不思議なもので彼らの人なつっこさや汗を流しての警備ぶりにひかれてすっかり仲好くなりイヤだと思ったその銃を借りて樹上の鳥をねらったりするようになった。

リバー・サイド ホテル

護衛隊長のジープを先頭に一行はシャン高原前縁のテラ ロッサの道を走る。

走り初めの頃は路傍の露岩についてアレコレと話をしたり煙草に火をつけたりしていたのだがやがて前を行く軍のジープがまき上げる粒塵に閉口してきた。

「前の車から離れなさい」

「君はゆっくり走るべきだ」

だが サッパリ通じない。印度風のターバンを捲いた運転手君はポーカーフェイスで相も変らずくっつい

て走る。かくなるは自衛手段と手拭で顔を包んだ。今度は汗と粒塵とが混り合っ て ベトベトしてきたのに困ってしまった。また手拭をとる。手拭は赤く染っていた。いくら鼻をかんでも赤土は消えなかった。途中の小さな部落に出たところで先頭車が止まり小休止。後続車はなかなか現われなかった。

またまた当方のジープは軍のジープの後塵を浴しながら走る。警備上くつついて走れとでも言われているのか。あきらめに身を任せたままセプードンの部落に到着した。

ここセプードンはピンマナ東方地域の錫・タングステン鉱山群の開発に当るMDCピンマナ支部の補給基地であり付近の鉱床探査基地である。

案内された建物は中央に広間左右にベッドを並べた部屋を配し広間からペランダに出られる。床はラワン壁は竹でできている。山の斜面に建ててあるので入口は7段ばかりの階段を上ればよいのだがペランダの方は高い柱で支えられ目の前に小川が流れ対岸の丘にはパコダがみえる。お気に召した一同は早速ながら「リバー・サイド ホテル」の名をつけた。電燈こそなかったがランプもまた結構。宵ともなれば涼しい風が吹いてくれ金星は手がとどくかと思われるほど明るく大きかった。

驚いたことには氷が搬びこまれている。聞けばピンマナからとのことだったがそれはこのセプードンから50kmも離れ16kmも歩かなくてはならないNo.4鉱山の宿営でもお目にかかったのである。この氷が日本人のためにだけ使われたことは言うまでもない。

国営商店で入手しはるばる搬ばれてきたビルマのビールはまだ冷えていなかったが遠慮するMDCの人々も加えてんでに氷を入れて乾盃する。大使館さし入れのウイスキーのオン・ザ・ロックも始まった。

パダチョン 鉱山へ

「蚊張つき寝袋」から起き出してみるとセプードンの丘に陽が昇り始めていた。混り気なしの朝の空気を胸一杯に吸って正に気分はさわやかであった。

トラックの調子が悪いとのことで珍しく出発が遅れる。部落の大人たちが遠まきに見つめ子供たちがハシャギ回っている中をやっと車が走り出す。子供たちと手を振り合っ てのお別れだった。

部落をぬけた途端にまたまた「砂ぼこり」の洗礼が始まった。「雨期だったらどうなのでしょうね。まずジープでも動けないのじゃありませんか」そんな話をしながら運転手君のターバンを真似て手

拭を頭にまいた。 幸いなことに高度を増すにつれてスピードが落ち 前ほどの「砂ぼこり」ではなくなった。 誰もがヤレヤレと思ったことだろう。 煙草の煙も流れるようになった。

20km ばかり走ったところに 小さな部落が現われた。 名前は忘れたが 何軒かの高床式家屋が丘にへばりついている。 ジープはその部落の方に道を取り 一軒の家の前に停まった。 そこには10人ばかりの村人が集っていて 一行にそれぞれ飲物をすすめてくれる。 淡黄色に濁った液体だが その冷たさと甘酸っぱさ 何かは知らないが果物の香りにアルコール分とよき甘露であった。 この地酒 私には度が強すぎる。 そこで2杯目は固辞し 冷たい牛乳で満足した次第。



第28図 パダチョン鉱山部落の「大手門」Welcome とは嬉しい立つは大丸(日本鉱業)鈴木(OTCA)の両氏

ジープはさらに東に走る。 急な坂を上り下りしてセブドンから 34km そこでジープは停まった。 そこから先 車は通れないという。 先は一本道

「では お先に」

と 歩きかけたが 他の人は動かない。 仕方なく 荷物の積み換えを見守ることにした。 30人ばかりのビルマ人たちがジープやトラックの回りに集り それぞれ頭の上に「竹籠」を乗せたり トングリ帽子を逆さにしたような「おいこ」を背に荷物の配給を待っていた。 一人の屈強な若者が各人に荷物をふり分けている。 思ったよりはテキパキと事が進んでゆく。

荷物を彼や彼女たちに任せて 一行は出発することになった。 私と OTCA の鈴木さんが調査団の先頭に行く。 私たちの前を2人の兵士が進む。 道は坦々と山腹を縫い 両側に茂る密林がかっこうの日かげを作って結構な足ならしである。 「もず」かと思うような「せみ」の鳴声が降るようであった。

前に行く彼の兵士。 一人は革の軍靴に革脚絆 右の腰に布の雑のうと拳銃 左後に水筒を下げ カウボーイスタイルの帽子に新品(?)の戦闘服をまとった 子供供した将校さん。 これが隊長さんらしかった。 もう一人は自動小銃を手に 戦闘帽 ズックの軍靴 着ざらしの戦闘服と雑のう そして水筒。 30歳くらい。 一応サマになっている。 だが 私たちの後方を歩いている兵士たちは趣が違ふ。 軍靴をはいている者は一人もいない。 ズック靴かサンダル 裸足だっている。 ビルマでは うら若い娘さんでもまず裸足だが 軍隊でもそれが許されているとは知らなかった。

後の方で誰かが声高に言った。

「結構なパーマ スタイル。 ビルマ向き」

鉱山に着いて初めて知ったのだが なるほど一人の兵

隊さんの戦闘服の風通しのよさそうなこと。 背中がビリビリに破れ それにアンダー・シャツを着ていないものだから いわばまる出し。

それほど汗もかかずに 4km ばかりで 開けた台地に出た。 竹の框に門がみえ そこに「Welcome!」と白いペンキで書いてあった(第28図)。 パダチョン鉱山部落の「大手門」に到着である。 この大手門をくぐるとそこに一行のための特設休息所が作っており 冷たい牛乳の馳走にあずかった。 言葉は通じなかったが ニコニコしながら 迎える村人たちと握手を交し 一息風を入れた。

一同が長い一列縦隊になって 対岸の鉱山基地に向う。 渡る小川は砂錫鉱床の採掘場となっていた。 「ジャン・ジャン カン・カン ジャン カン・カン」と合奏が聞えてくる。 お祭でもやっているのかと思ったら とんでもない。 一行を歓迎するミュージックであった。 鉱山基地の入口の両側に並んだ部落の人々がドラとカネを打ちならし 若い娘さんたちがジャスミンの花を一人一人に手渡しての出迎えである。 思わず日本語で「有難う」と言ってしまう。 私は2人の娘さんから1本づつ貰ってマゴマゴし ついにシャッター・チャンスを逃してしまった。

「ビルマ人は 岸本さんを見ると 特別に親しみを感ずるのさ」

「日本から伯父さんが帰ってきたようなものかもね」と どなたさんが申された。

基地はつい先なのだが 坂道は急だった。 しかし一行はテレながらも カネとドラに励まされて一気に登った。